26PB-pm308

月経周期と酸化ストレス・うつ傾向との関連性

○南 英里[1], 山 佳織[1], 町田 麻依子[1], 早勢 伸正[1], 三浦 淳[1]（[1]北海道薬大）

【目的】月経周期に伴う性ホルモンの変動は、心身の状態に影響を及ぼす。月経前に抑うつ、不安、焦燥感、易疲労感、乳房圧痛等の症状が現れる病態を月経前症候群（PMS）とよぶ。中でも日常生活に支障をきたすほど重篤な場合を月経前不快気分症候群（PMDD）とよぶ。酸化ストレスが月経に関与していることは報告されているが、PMS、PMDD への影響は報告されていない。そこで本研究では、月経周期に伴う身体症状と酸化ストレス、うつ傾向との関連性を調査した。

【方法】対象は 18 歳以上で月経周期が概ね一定であり、医薬品・サプリメント・健康食品を摂取していない、喫煙歴のない女性 21 人（21-24 歳、平均 22 歳）とした。月経前後の BAP 値と d-ROMs 値を FRAS4（ウイスマー社）で測定し、それぞれ抗酸化能と酸化ストレスの指標とした。同時に CES-D うつ病尺度を記入した。PMS、PMDD の判定は、PMDD 尺度（秋元世志枝ら、2009）を用いて行った。本研究は、北海道薬科大学研究倫理委員会で承認されている。

【結果・考察】PMDD0 人、中等症～重症 PMS8 人（PMS(+)群）、軽症 PMS～なし 13 人（PMS(-)群）だった。分散分析の結果、BAP 値は月経前後、および PMS(+)群・(-)群間で有意差があった。d-ROMs 値は有意な変化がなかった。CES-D 値は月経前後、PMS(+)群・(-)群間で有意差があった。多重比較の結果、BAP 値は PMS(+)群で月経前に有意に低下したが、PMS(-)群では有意な変化はなかった。CES-D 値は PMS(+)群・(-)群ともに月経前に有意に上昇した（うつ傾向が増大）。月経前、PMS(+)群は PMS(-)群より CES-D 値が有意に高かった。以上より、PMS の病態に月経前後の抗酸化能の変動が関連していることが示唆された。すなわち、抗酸化能の変動を抑えることが PMS の効果的な対処法となる可能性が考えられた。